



Title	〈書評〉 東田雅博著『大英帝国のアジア・イメージ』 (ミネルヴァ書房、1996年)
Author(s)	秋田, 茂
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 191-195
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99227">https://hdl.handle.net/11094/99227</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 書評

### 東田雅博著『大英帝国のアジア・イメージ』 (ミネルヴァ書房、1996年)

秋 田 茂

#### I

この書物は、イギリス近代史研究者の東田雅博氏が十年近くにわたって構想してきた研究をまとめあげた書き下ろしの作品である。この書評では、内容の単なる紹介と要約は行わずに、イギリス帝国史を専攻する評者にとって興味深い論点を整理することに中心を置きたいと思う。

#### II

本書の特色は以下の三点にまとめられる。第一に、本書は十九世紀ヴィクトリア時代のイギリスの四大総合雑誌に見られるアジア・イメージの網羅的な叙述を通じて、「帝国主義の眼差しの文化」を同時代人と同じ目線で描いた帝国主義の文化史研究である。第二に、注目を集めるイギリス帝国史の視角からヴィクトリアニズムを再検討しようとする意欲的な試みであり、いわば「帝国からの逆照射」を通じてヴィクトリア時代を再考しようとする。第三に、著者自身も言うように自由貿易論者の世界像を「文明」の視角からとらえ直し、経済政策史と文化史とを接合しようとする研究である。東田氏は本書に結実した帝国の文化史と研究を始める前に、ヴィクトリア時代の経済政策史と自由貿易論に関する多くの優れた論文を発表していたが、そうしたいわばハードな経済政策史研究が基盤になっているだけに、本書は文化史研究にありがちな皮相な叙述の展開や形式論の弊害から免れている。

## III

次に、本書の内外の学界に対する貢献を考えてみたい。

まず、同書はサイド的な「オリエンタリズム」論の批判に成功しているといえる。特に、総合雑誌に見られるアジア観の変貌の様相をヴィヴィッドに描くことに成功しており、固定的ではない「変化の眼差し」でアジア観が的確にとらえられている。理論的で形式的なサイドの叙述と対比してみると、本書の素晴らしさが際立つ。イギリスの学界でも、ジョン・マッケンジーを編集責任者とする帝国主義の文化史や社会史をテーマとする研究叢書がマンチェスター大学出版局から続々と出版されて話題になっている。本書は、偶然にもマッケンジーらの研究と同じテーマを扱っているものの、全く独自に行なわれた日本人研究者による実証的なイギリス帝国主義の文化史研究である点は高く評価できる。

日本の学界での研究蓄積に引きつけて考えてみると、本書は1960年代に松井透氏が先鞭をつけた一連の植民地統治思想論、アジア・イメージ論に関する先行研究を補完するものになっている。すなわち同書は、松井氏が提起した基本的な思想史的枠組み（『思想』489号「イギリスのインド支配の論理」1965年、および同530号「近代西欧のアジア観と植民地支配論」1968年）を踏襲しつつも、匿名性を持つ総合雑誌を主要史料として利用することで、松井氏の研究では必ずしも十分ではなかったアジア・イメージの具体化と精緻化に成功している。さらに、東田氏は松井氏が扱ったインドだけでなく、中国、日本も含めた三地域を分析対象として取り上げており、アジア・イメージの総合的把握を比較の観点から模索している点も意欲的である。

最初に言及した「帝国からの逆照射」との関連では、ヴィクトリア時代を「文明の時代」とする斬新な時代規定が注目に値する（第二章と終章）。東田氏はヴィクトリア時代中期を「文明の時代」ととらえ、やがてそれがヴィクトリア時代後期に「帝国の時代」に転換していく中で、「文明化の使命」が「帝国の使命」に変わる状況を的確に描いている。内外の学界でヴィクトリア時代を本国史の側から描いた優れた研究は数多くあるが、特にヴィクトリ

ア時代中期のイギリスのセルフ・イメージを「文明の時代」として明確にした点は他に類例がない。ヴィクトリア朝研究に対する帝国史研究者ならではのユニークな貢献であろう。

#### IV

本書は以上述べたような諸点で優れているが、問題がないわけではない。

まず、本書の叙述が依拠しているヴィクトリア時代の四大総合雑誌の史料価値をめぐる問題がある。東田氏は*Westminster Review*, *Edinburgh Review*, *Blackwood's Edinburgh Magazine*, *Quarterly Review* の四大総合雑誌で当時のアジア・イメージを十分に捉えることができると考えているが、はたしてそうであろうか。ヴィクトリア時代に出版された主要な雑誌の記事とその著者を整理した *Wellesley Index of Victorian Periodicals* (全5巻)は、東田氏の研究に大変役立った書誌であるが、その中には四大誌以外の多くの定期刊行物に関する情報も収録されている。東田氏の研究の主眼は、中産的知識人が抱いたアジア・イメージの解明に置かれているが、そうした限定をつけたとしても、他の雑誌メディアとの関連をさらに追求してもよかったのではないだろうか。たとえば、四大誌と並んで評価が高く、政治家も好んで投稿して帝国問題に関する記事も多く掲載された *The Nineteenth Century* は分析対象とするに値する。帝国・植民地問題をヴィジュアルな形でわかりやすく伝え評判になった諸雑誌の中から、分析の対象をあえて四大誌に限定した理由がもっと説得的に語られるべきであろう。さらに、アジア・イメージを論じる際には、論者の情報源が重要である。それは同時に、どのレベルでのアジア・イメージを問題にするのかという根本的な問いかけにもつながる。東田氏の研究が洗練された中産的知識人のイメージを対象にしていることは前述の通りであるが、そのレベルのイメージ論と現実との間には、当然認識のギャップが存在する。評者は、その落差がなぜ生じたのかを考えるのが重要であると考え、その解明には、モノ、ヒト、カネの現実の動きに関わる「情報」源への言及が不可欠であろう。たとえば、東田氏が経済政策史研究で使った *The Economist* や *The Parliamentary Papers* にもアジア情報は掲載され、

世界各地から本国に送られる領事報告 *The Consular Reports* は現実との接点でアジア認識を考えるうえで必読の史料であろう。こうした生の情報源とイメージ論とを結びつけることで、立体的なアジア・イメージが描けるのではないだろうか。

次に、イギリス帝国主義のとらえ方が問題になる。本書で東田氏は、十九世紀中葉のイギリスのアジア世界に対する海外膨張のあり方を「産業資本の世界展開」という伝統的でオーソドックスな立場から論じている。イギリス帝国主義の解釈をめぐっては、1960-70年代の「自由貿易帝国主義」論争があるが、近年ではロンドン・シテイのサーヴィス・金融利害と海外膨張との関連を強調する「ジェントルマン資本主義論」が、ケインとホブキンズによって提唱されて注目を浴びている。東田氏は、「少なくとも本書が用いた史料では、対象とする時代の相違もあろうが、このような金融・サーヴィスの利害を析出することは困難であるように思われる」(243頁註19)と断っているが、本当にそうであろうか。本書の「文明化の使命」とインド・イメージを扱った部分でも度々言及されているが、インドにおける鉄道建設とイギリス金融利害との関連を明らかにできるような記述史料は本当に存在しないのか。視角を変えて再検討する価値もあるのではなかろうか。さらに、「パックス・ブリタニカの終焉」をめぐる議論や世紀転換期のとらえ方も問題である。本書では、世紀転換期におけるイギリスのセルフ・イメージが、ヘゲモニー国家としての地位の喪失とともに「文明化の使命」から「帝国の使命」へと転換してゆく点が強調されている。この時代のとらえ方もオーソドックスではあるが、最近の経済史やイギリス帝国史の研究状況に合わせた再検討が必要であろう。イギリスの経済的「衰退」論の是非をめぐっても、「ジェントルマン資本主義論」では戦間期におけるイギリスの影響力の復活が主張されている。「パックス・ブリタニカの終焉に怯えつつ「帝国の使命」をもって世界に君臨するイギリスというイメージ」(242頁)が有効なのか、世紀転換期に没落の危機感には本当にあったのか。評者には疑問に思える。

なお東田氏は、本書に続いて、力作『図像のなかの中国と日本—ヴィクト

書評 東田雅博著『大英帝国のアジア・イメージ』（ミネルヴァ書房、1996年）

リア朝のオリエント幻想』（山川出版社、1998年）を出版した。その内容は、前著を補完するもので興味深い、書評は別の機会に譲りたいと思う。

（付記：本書評は、インターネット学会H-NETが開設しているホームページH-JAPANに1996年度に掲載される予定であったが、書評者の個人的な都合により実現できなかった。また本稿は、1996年6月29日に開催された広島史学研究会での例会報告に基づいている。執筆の遅れのために御迷惑をおかけしたH-NETおよび関係諸氏におわび申し上げます。）

